

震災特集号の発行に寄せて

神戸大学大学院国際協力研究科長

豊田 利久

「あの時」から、早くも3年目を迎えようとしている。表面的には被災地における復興がかなり進んでいるようにも見えるが、その程度が、地域・所得・業種等によって階層的になっているのが目立つ。被災地全体をマクロ的に捉えても、経済的地盤の低下によって雇用も減り、人口も減り、したがって需要が減るから売り上げや生産が減るという「悪循環」を断ち切れずにいる。

暗い、悲しいことではあったが、「国際都市」と言われる神戸を中心に起こった大震災であったために、「国際協力」を学ぶわれわれには何か検証しておくことがあると思われた。これが、この特集号が企画された大きな理由である。ロニー・アレキサンダー教授を中心にした編集委員は、すでに多くの震災関連の研究が発表されている中で、この研究科と関連する論文を予定通り集めることに成功した。その努力に感謝したい。

「あの時」は、この研究科が設立途上にあり、第1期生が修士課程を修了する間際であった。彼らが修士論文を提出する間際であり、大学に泊まり込んでいた者もいて、多くのエピソードが残っている。あれから3年、今、博士課程の設立を終えようとしている。震災の影響を乗り越えて、この研究科は前に確実に進んでいる。しかし、やはり「あの時」を、われわれの視点で検証しておくべきではない。

どのような検証がなされたか、どのようなメッセージが伝えられているか、読者に判断してもらうことにしたい。